

2018年7月22日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「塩の柱」

聖書：創世記19:1～29

悪名高いソドムとゴモラの町が滅ぼされる時に、神は御使いを送り口とその妻や娘たちに逃げるように指示した。《命がけで逃れよ、後を振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。山に逃げなさい。さもないと、滅びることになる。》ところが、口の妻はもう少しで逃げ切ると言うところで、後を振り返り町を見る。すると彼女は「塩の柱」になってしまった。何故、後ろを振り向いてしまったのか？

口の妻は、町に残した家財、名誉に心残りを覚えたのではないと言われる。過去にこだわり続けて生きていた願ったのではないか。ルカ福音書 17 章に「口の妻のことを思い出さなさい。自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」と。口の妻には名前が出てこないが、その理由はこの世のものに未練のある生き方の象徴として、口の妻があるとされる。「塩の柱」は無益な人生になってしまうと言う出来事の象徴として見られるが・・・。

ただそうは言っても、何か腑に落ちない。何故、口が塩の柱にならずに、妻なのか？・・・と、世の女性は思うのではないか。

一色義子著『エバからマリアまで一聖書の歴史を担った女性たち』の中で、「彼女が神様の戒めをおろそかにしたということは確かに否めないが、わが身が安全だと気づいたその瞬間、思わず愛する者の姿が心に浮かんだのではないか」とする。この「愛する者の姿」とは、あのソドムに置いて行くしかなかった、嫁いだ娘たち、その婿たち、そしておそらく居たであろう孫たち。14 節、口は嫁いだ娘たちの婿のところへ行き、ここから逃げるように促すも、「婿たちは冗談だと思った」と記されている。

一色氏は、そういう背景の中で「口の妻は、あの硫黄の火が降るソドムに嫁いだ娘たち、頑固にも神様の警告を無視した婿たちのゆえに、孫もろとも一家が破滅するそのさまに耐えられなくて、思わず、痛ましい思いと愛の心で、家族を思って振り返ったのではないか」と言う。その視点で見て行く時、あの「塩の柱」とは、世の蔑まされてきた名も無き女性たちの悲しみ、憎しみ、そして優しさ、愛がその「塩の柱」に象徴としてあるのではないかと思わされる。

そしてこの「塩の柱」には、やはり「後ろを振り返ってはいけない」というメッセージは含まれているであろう。過去に囚われ過ぎるのではなく、前を向いて歩んでいかなければならないこともある。その両方のメッセージがこの「塩の柱」にはあることを覚えたい。(神谷)